

MACF 礼拝説教要旨

2023年6月18日

「二人の祈り」

ルカによる福音書 18章

「ファリサイ派の人と徴税人」のたとえ

9 自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対しても、イエスは次のたとえを話された。

10 「二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人だった。

11 ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。『神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。

12 わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。』

13 ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください。』

14 言うておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、

あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」

ある意味でとてもわかり易いたとえなのですが、実はとても深刻な内容を含んでいるように思います。

1) 「ファリサイ派の人と徴税人」

当時の社会では、彼らが礼拝するしないにかかわらず、社会的にファリサイ派の人への尊敬や社会的立場の容認があり、徴税人については、「親の代から金に汚く、ローマの犬のような仕事をしている不潔な人間」というレッテルが貼られていたようです。

社会の中で彼らが肩を並べて生きられる土壌はまったくありませんでした。それは異邦人に対するユダヤ人の感情とも似ていたかもしれません。

つまり、比較の対象外なのです。「神に選ばれた人」と「神に見捨てられた人」と思われるくらいの差別がありました。ですから、ファリサイ派の人たちは、おそらく自分で意識することなくあれこれやっているわけですが、実際には、徴税人の目から見たら「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人」と映ったことでしょう。

2) 共通の出来事としての祈りと礼拝

これら二人の人がそれぞれ礼拝にやってきます。

祈るためにやってきます。

神の前に立つという作業は、どんな人にも開かれている共通の土台です。

実は、そういうことについても、大きな偏見があり、わたしたちは良いけれど、あの人達は神の前には立てないでしょうと勝手に決めつけてしまう傾向をわたしたちは持っていないでしょうか。

人間の社会では、誰かに「お願いします」と懇願する際、いわゆるコネがある人は有利であり、それがない人は不利なことがよくあります。

でも、神様の前ではオープンなので、誰でも神様を信頼し祈ることができます。

3) 祈りの内容

ファリサイ派の人の祈りは自分の心の中の密かな思いが捧げられています。

『神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。 12 わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。』

ここにあるのは「比較による自己賛美」です。

「神様、私は人には言いませんが、大したもんでしょ。ほめていただけませんか」「あんな奴より遥かに私のほうがマシですよ」という感じの祈りです。

もちろん、実際的に彼は正しいと思うことを実行し、悪を避け、断食と献金はしっかり守っているのです。それ自体の中には素晴らしさはないのでしょうか。

『神様、わたしはほかの人たちのように』

「この徴税人のような者でもないことを感謝します。」

という言葉がとても気になります。

これは比較の世界に身を置いていて、自分は勝っている、自分は優れているということを人生の「土台」にしながら神様に認めてもらおうと願っている人の姿です。

放蕩息子の話に出てくる兄の言葉とよく似ています。

ルカによる福音書 15 章

「28 兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。 29 しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。 30 ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』

過大な自意識、人への軽蔑、自己憐憫そして愛のない生き方がそこには浮き彫りになっています。

一方、徴税人は

13 ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください。』

となっています。

自分がこの社会で生きていくための力のすべては、神様からの憐れみ以外にありません」という信仰の告白であり、神様とつながり、神様からの憐れみを求める姿です。

ここにある自己紹介はファリサイ派の人とは随分違います。しかも、それを言葉に出し、胸を叩きながら、こういうのです「罪人の私を憐れんでください」

罪人という意味は犯罪人という意味よりもむしろ、的外れな生き方をしてしまう私、という意味でしょう。

社会的には軽蔑の対象になっており、世襲制の徴税人という生き方は彼の逃れられない生き方だったと思います。しかも、徴税にかかわる仕事の中で厳しい状況もあったと思います。

彼はそういう現実の中で、右往左往しながら生きていた自分をそのまま神様の前に申し出るのでした。

「罪人の私を憐れんでください」

その祈りの中には、隣に誰がいるか、隣の人が何を祈っているか考える余裕など全くありませんでした。とにかく、神様の憐れみと愛に触れさせていただかなければ自分の人生に喜びや生きがいを感じられなくなってしまうという意識でいっぱいだったと思います。

4) 高ぶるもの、へりくだるもの

14 言うておくと、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」

このイエス様の結論は、今のわたしたちに何を教えているのでしょうか。

ファリサイ派の人の中に見える「他者との比較、見下した考え、自己賛美」は気をつけたいといつでもわたしたちの心に入り込んできます。

神様の憐れみに頼るほかはないのだと、言葉では言えても、実際は「自分の頑張り」で神様のまえに正しくあろうとしていないのでしょうか。

その際、誰かを見下してしまっていないのでしょうか。

それぞれこの箇所を丁寧に読み返しながら、思い巡らし、自分の心に神様からの語りかけをしっかりと受け止めて前に進みたいと思います。

MACF 礼拝礼拝説教映像」はこちらです。

<https://youtu.be/5P3RO5UX67w>